

令和 8 年度 第 1 回 ヨコハマ国際まちづくり推進委員会 会議録

日 時	令和 8 年 6 月 25 日（木）10 時 00 分～11 時 30 分
開 催 場 所	市庁舎 18 階共用会議室 なみき 2～5
出 席 者	エソダ委員、加藤委員、北川委員、木村委員、三枝委員、柳瀬委員、四元委員
欠 席 者	坪谷委員、韓委員、福山委員
開 催 形 態	公開（傍聴者 0 人）

委員長の選任等

【決定事項】

- ・委員長として三枝委員を選出。
- ・委員長職務代理者については、三枝委員長から坪谷委員を指名。本人欠席のため、本人了承を得て決定。

報告（１）市民局国際平和・ダイバーシティ推進部の取組について

【主な意見】

・市民局国際平和・ダイバーシティ推進部へ、国際局で国際交流ラウンジの運営に関係していたところは、全部移ったということか。

→国際局の多文化共生担当が全て、市民局へ移っている。

・GREEN×EXPO 2027 に地域の外国人が参加できるというような計画が、横浜市国際交流ラウンジ運営ガイドラインにも記載されているのか。

→ガイドラインに GREEN×EXPO 2027 の記載はない。GREEN×EXPO 2027 では、ボランティアを募集しているので、外国人の方にもご活躍いただきたい。

・多文化共生事業に地域活動への参画が入ったことは良いと思う。ハードやソフトを行政が用意するのは良いが、現場に行かないと現場のニーズと乖離がある可能性がある。実際のニーズに沿った施策を進めていただきたい。
→国により考え方が異なることもあるため、各々に応じたアプローチが必要であり、色々なご意見を聞きつつ進めていく。

・学校には国際教室があり、子どもの多文化共生の学びの場はある。保護者の日本人向けの多文化共生やダイバーシティの教育、体験はあまりないと感じている。

様々な国の人達から、隣人がどういう人かわからない、災害時に、地域の人とどのように対策できるかわからない、という声を聞く。リーフレットも大事だが、外国人は、リーフレットを見ること自体に慣れていない。外国人の手元にとどく方法を考え、身体を使って学ぶ機会を作っていくことが重要だと思う。

・多文化共生の部署が国際局から市民局に移ったことは良い面もあると考えている。

市民局が所管する、地域支援や区役所、人権の部門との連携の広がりが期待できる。多文化共生を市民局の中で、国際平和や男女共同参画と一緒に展開していくということは良いことだと思う。一方で、国際機関との連携部署は政策経営・国際戦略局に移ったが、平和の推進、多文化共生の推進をするには、国際機関との連携は重要であり、引き続き関係を持っていただきたい。また、多文化共生、男女共同参画を推進するにあたり、市民局の既存の部署だけでなく、教育委員会など他部署との連携も大事であり、全庁的な旗振り役になっていただくことを期待している。

→ピースサークル 1 回目（3 月実施）は国連広報センター、2 回目（6 月実施）は国連 UNHCR 協会と連携した。引き続き、国際機関との連携を進めていきたい。

他部署との連携について、この一年間の間にも庁内での意識の変化があった。庁内の連携が強まっている。市民局にきたことで、外国人も市民の中の一人であるということが、メッセージとして伝わっている。この流れを途切れさせることなく各部署との連携をより一層強化したい。

生活に直結する部署と関係課長プロジェクトを実施している。それぞれの部署が多文化共生の意識を持って取組を進めていけるようにしていきたい。

議事（１）多文化共生の取組について

【主な意見】

広報活動について。現状では、大人向けの広報が大部分だと思うが、学校を生活圏とする子どもたちに学校で伝え、教育することにより、理解した子どもたちが家庭で親に伝える、という流れができることになる。

教育委員会でも、多文化共生に向けた取組を実施していると認識しているので、是非連携していただきたい。

学校の授業参観に、外国人の方がどれだけ参加しているのか。自分の子と他の子たちの交流の様子や、学びの状況を保護者が理解するうえで貴重な場になる。

→教育委員会との連携は非常に重要と考えている。子どもたちを通じて保護者へ広報する視点については、新たな示唆をいただいた。

- ・帰国生徒の会で、保護者を巻き込み、全校に発信することをしていた。子どもたちの吸収力は高く、子どもの力を借りるのも大事。

- ・横浜市立の学校は、「すぐる」で発信を行っているが、「すぐる」を活用しきれない外国人保護者もいる。多言語化されているが、添付される、懇談会の案内は、日本語の資料でルビもない。

例えば、「懇談会」を直訳しても、それが何だかわからず身構えてしまう。

- ・「すぐる」を使う際、漢字が読めたとしても、文化の違いは感じる。説明資料は、相手は日本人という想定で作成されている。挨拶から始まり、最終的にそのお知らせの目的がわからない。日本語を分かっているつもりでも分からないことがある。例えば「上履き」を直訳すると「スリッパ」と出る。外国人は日本語に自信がなくて、自分からは参加していけない。日本のことを学ぶだけでなく、外国のことを教える、といったインセンティブがあるといいと思う。文化や習慣は違うけど、外国人も普通の人だよ、ということを伝えていけるといいと思う。

- ・「すぐる」では、学校により活用方法が違う。修学旅行などの課外活動の時に、今どこにいます、と写真付きで報告してくれた。学校ごとに違うが、それは良いなと思っている。資料の多言語化はして欲しい。アプリだと、通知が来る設定ができるので、通知が来れば、見る習慣がつく。リーフレットをHPに掲載するだけでなく、そういう仕組みが必要かと思う。海外で自分自身が壁にぶつかった経験があるので、彼らが日本で困ることが理解できる。行ったことも経験したこともないと、文化が違うことは何となくわかるが、その経験がないことで、ここまでは受け入れられないという意見もある。それはやはり経験がないからだと思う。生活ガイドは、経験した人が説明するのが良い。日本人が外国の方に英語に訳して伝えても、理解できない可能性が高い。その国の文化を知っている人から話してもらうことが大事。

- ・就学前の子どもを持つ保護者は、日本の保育園、幼稚園にどうアクセスしていいかわからない。日本語ができないと、保育園からの情報がわからない。先生とのコミュニケーションがとれないという課題がある。就学前の子どもを育てている保護者は、孤立しがちだと思う。そのような家庭へのサポートが大事。

自身も引っ越したばかりだが、数週間の生活だけでも、区による対応の違いを感じている。外国人住民が多い区役所は外国人の対応がスムーズで言語の対応もしている。リソースに限りがある中で、優先順位をつけなければならないこともあると思うが、外国人が少ないコミュニティであっても、その人たちが孤立しない視点、誰も取り残さない、という視点は大事かと思う。

- ・外国人キーパーソンは少ない状況。キーパーソンを育成支援することは大事。セミナーを実施しても、外国人がなかなか参加しない。自分の信頼できる人が行こう、といえは行く。

同じ幼稚園でも、先生によって多文化共生の意識に差があり、大人の教育も大事だと感じる。

- ・赤ちゃん訪問に行く民生委員や外国人家庭を受け入れる保育園の園長など、現場の方は、外国人との接し方に戸惑っている。やさしい日本語を使うことや文化の違いがあることについて伝える機会づくりを計画している。

- ・外国人にとって町内会のイベント参加は難しいと思う。

以前、地元のもちつき大会に、外国人と一緒に参加したところ、地域の人と仲良くなったことがある。ほとんど日本語は話せないが、日本の文化、食べ物を学ぶ機会になった。食べ物は、文化を知るには一番だと思う。例えばベトナムや、日本の食べ物を食べるイベントなどは、人が来ると思う。小学校で毎月１回海外の料理が出る給食の取組は良いと思う。子どもたちが帰宅後、シンガポールのラクサを食べたよと言ってくる。そういうところから、他の国を知ることができる。ハードルが低く、参加しやすい異文化交流イベントを作って欲しい。そこで仲良くなった親たちが SNS グループで相談し、解決したりしている。つながりを作る場は必要。スポーツもいい。

参加しやすいものを作って欲しい。

・外国人、多文化共生をとりまく課題は多い。リソースが限られている中で、どこに注力していくか、選択にあたり、役所としての意図が必要になる。遠くにある目標の達成の一助になる、戦略性が大事だと思う。それをこれからより一層打ち出していただきたい。リソースを補うという意味でも、他局との連携が重要になってくる。

資料

資料1 委員名簿

資料2 市民局国際平和・ダイバーシティ推進部の取組について

資料3 多文化共生の取組について